

韓国の徴兵制が徴兵経験者に与える影響 —「男になる」という言葉を中心に—

山下 慶

The influence of South Korean conscription system on those who have experienced conscription: Focusing on the word "becoming a man"

YAMASHITA, Kei

Abstract

Focusing on the phrase "becoming a man," which expresses internal changes due to the influence of conscription, the purpose of this study is to understand how South Korean men perceive the meaning of the phrase and how they share it among themselves. To do so, I conducted two rounds of interviews to analyze the impact of conscription on their lives during it as well as their situations before and after.

South Korea is in a temporary state of truce with North Korea, and conscription is compulsory for its citizens for national defense. However, as conscription has long been entrenched in the nation, other purposes and connotations have become attached to conscription in addition to simply national security. For example, values such as "finishing conscription=mature, reliable" and "not finishing conscription=immature" are firmly established in Korean society. Among them, the typical phrase, "when you go to the army, you become a man," is a sign of masculinity defined in Korea and has long been accepted and used by Korean people. However existing research has not mentioned the meaning of conscription represented by "becoming a man". For example, there are questions about what a "man" is and what it means among Korean men.

In addition to "becoming a man", the words "becoming an adult" and "becoming responsible", which were frequently mentioned during the interviews, were also included in the survey because of their relevance to "becoming a man". As a result, although individuals had various interpretations of the word "man," there was no shared meaning among men. In addition, "becoming a man" and "becoming an adult" were synonymous, and "becoming responsible" are associated to militarized masculinity.

Keywords : South Korea, conscription, masculinity, becoming a man

要旨

本研究の目的は、徴兵の影響によって内面的変化を表す言説である、「男になる」という言説を中心に、徴兵経験者がこの意味についてどのように捉えており、また男性間でどのように共有しているかについて明らかにすることである。そのために、彼らの徴兵中の生活だけでなく、徴兵以前と以後の状況についても2回にわたるインタビュー調査を行いその影響について分析した。

韓国は現在も北朝鮮と休戦状態であり、国防のために国民に徴兵の義務を課している。しかし、長年徴兵が国家に定着すると、徴兵に対し国家の安全保障のためという意味に、他の目的や意味合いが付与され派生するようになった。例えば、「徴兵を終えたこと＝成熟した、頼もしい」、「徴兵を終えていないこと＝未熟」のような男性個人を評価するような価値観が社会に定着するようになったのである。その中でも、代表的な「軍隊に行くと男になる」という言説は、韓国社会が規定

する男性性の表れであり、長い間韓国国民に受け入れ使用されてきた言葉である。しかし、「男になる」に代表される徴兵をめぐる言説の意味については既存研究では言及されてこなかったのである。例えば、「男」とはどのようなものか、またそれは韓国人男性間でどのような意味で共有されているのか等である。

本文では、「男になる」の他に、インタビュー中に頻出した「大人になる」や「責任感がつく」という言葉についても、「男になる」という言葉との関連性を鑑み調査対象とした。その結果、「男になる」の「男」について、個人が様々な解釈を持っているものの、男性同士で共有されている意味は存在しなかった。また、「男になる」と「大人になる」は同義の意味であり、「責任感がつく」に関しては、軍事化された男性性と関連性があることが明らかとなった。

キーワード：韓国 徴兵 男性性 男になる

1. 序論

本稿の目的は、現在徴兵制度が施行されている韓国で国民の義務である徴兵を体験した男性、特に20代の大学生をインフォーマントとしインタビュー調査を実施することで、徴兵が彼らにどのような影響を及ぼしているか、その中でも徴兵にまつわる言説の「軍隊に行く」と男になる」という言葉を中心に分析することである。

韓国ではテレビ番組に『진짜 사나이 (真の男)』という人気コーナーがある。このコーナーは韓国で活躍する芸能人やスポーツ選手を、軍隊で数日間生活させるというものであり、シリーズ化もされている。番組内では、韓国で有名な人物たちが現役将校たちに混ざり訓練に耐える姿や、訓練内容も基礎軍事訓練ではなく、本格的な訓練を対象としたことで人気を博した。また、この番組は徴兵を経験した男性だけでなく、その他の世代を含む家族で視聴することが多い番組であったため、軍隊に入隊経験がない子どもでも内実を知ることができる内容である。また、番組タイトルである『진짜 사나이 (真の男)』とは、韓国に存在する徴兵に関する言説の一つであり、この言葉には軍隊に入隊し、あらゆる試練に耐えることで「男になることができる」という意味が付与されている。なお、この言説は徴兵が義務化されている韓国国内ではごく一般的に知られていることである。

韓国の青年は特別な理由がない限り20歳になると約2年間軍に入隊することが義務付けられている。なぜなら、韓国は現在も北朝鮮と休戦状態にあるため、国家の安全保障という観点から一定の軍事力を保持しなければならないからである。しかし、その目的と引き換えに特殊な環境である軍隊での生活は、韓国人男性に大きな困難を与えている。厳格な位階秩序と上位下達の命令体系を持つ軍隊に適應するため、彼らの精神は再社会化され〔春木 2011: 11〕、また、無事に困難を乗り越えた彼らを韓国社会は頼もしく成長した存在として扱うのである。つまり、軍隊とは安全保障という目的を持った組織でありながら、男性を成長させる特別な場であると韓国社会で認識されているのである。それに伴い、上記で述べたような「真の男」や「軍隊に行く」と男になる」という言葉に代表されるような言説が誕生したのである。

「男」という言葉が付随している通り、これらは韓国国内で見られる男性性を表す言説であるといえる。日本のジェンダー学において、「男性性」は、「男らしさ」を表すことが多い概念である。またそれは、階級、下位文化、年齢、人種といった様々な文化要因によって左右され、

その概念が再生産されるように社会的行為規則で構成された記号を指すものである〔존 베이넌 2011:15〕。つまり、「男性性」とはその時代や文化、社会背景等の要因によってその内容が決定され、社会内の規範や理想を表し、かつ時代に合わせ常に変化する流動的なものである。

徴兵を義務化した韓国において男性が徴兵を終えることはごく当たり前の必要条件であり、かつこれらを満たしたものに対して「真の男」や「男になる」という称号を与えることで、男性性を再生産してきたのである。しかしながら、ごく当たり前であると考えられているからこそ、これらの言説に表れる「男」という意味について、徴兵経験者である彼らがどのように捉えているかについては言及されてこなかったのである。

よって、本研究は徴兵の影響によって変化したことを表す言説、特に「男になる」の「男」の意味に着目し、個人がこの意味をどのように捉え、男性間でどのように共有しているかについて明らかにする。そのために、彼らの徴兵中の生活だけでなく徴兵以前の影響も視野にいれ、入隊以前・中・以後の状況を踏まえながら、徴兵の影響についてインタビュー調査を行い分析することとする。

2. 先行研究

2.1 韓国人男性の男性性

韓国における男性性研究は、何らかの形で男性性と「軍事主義」「義務兵役」を関連付けて議論されてきた傾向にある〔佐々木 2019:21〕。しかし、同国の伝統的な思想体系である儒教における男性性はそれと異なる様相を呈している。これらの違いは時代や社会背景によるものであり、時代の流れを捉えるうえで無視することができない重要な観点であるといえる。

儒教が導入され定着したのは李氏朝鮮時代（1392–1897）である。特に、中・後期ではその思想体系が非常に厳格化され、貴族階級である両班を中心に遵守された。朝鮮時代の中でも時期によってその様相は異なるため一概にはいえないが、儒教を基本理念としたことで、身分や階級を分ける支配体制が堅固となり、孝を強調した男性中心の思想は性別分業の意識を生み、女性の存在を規制することとなった。つまり、儒教思想は社会の統治原理であり、社会規範としての中心的な役割を男女共に果たしていたということである。

当然このような厳格な社会において誕生した男性性とは、儒教の思想を中心としたものである。そして、その具体例として儒教理念の具現者であるソンビ（선비）が挙げられる。ソンビとは主に知識や芸術的感覚を体得し、生活の趣と風情ある人生を追求した両班階級を指す〔황진희・김선희 2020:245〕。ソンビの特質とは、儒教における義理精神に従い国家と民を導き、学問に励み、職位の上下差別ない平等精神を持ち合わせている点である〔김장태 2001:73〕。そして国家と民を導く方法として、詩や文学を用いて主張することが一般的だった〔박노자 2009:74〕。さらに、ソンビは内面の美と外面の美を同一のものと考え、白く滑らかな肌を保ち、髪を整え香水を使用するなど端麗な美しさを追求した〔황진희・김선희 2020:246–248〕。

つまり、ソンビにとっての男性性は暴力的で勇ましいものではなく、学問やそれに伴う儒教における道徳心、また一部では現代人が考える女性らしい美と結びつくものであった。しかし、儒教との関連性において培われた男性性は、日本統治時代を迎え変化していくことになる。

上記のように、韓国における男性性研究は「軍事主義」や「義務兵役」と関連付けて議論さ

れることが多い。これは植民地からの解放後、特に韓国社会の軍事化を積極的に行った朴正熙政権時代以降に多くみられる。以下、朝鮮時代における男性性を「伝統的な男性性」、朴正熙政権以降の男性性を「軍事化された男性性」と呼ぶこととする。

1953年朝鮮戦争が休戦状態になり国家分断の悲劇と経済的・精神的傷を負った韓国は、国家存亡のため急速な近代化が求められた。そのため政治・経済・教育の場において「軍事主義」的特徴を持った改革が行われ、特に1960年代以降の朴正熙政権下においては、「愛国・愛族・反共」というスローガンの下、軍人出身者によってより活発的に実施された。軍事主義的な改革が実施された理由は、近代化に貢献する市民を訓練・量産するために軍隊の存在が最も適切であり、暴力の標的¹となる対象と自民族²（自国家）とを区別することで民族主義的・国家主義的共同体の結束力を形成するのに大きな役割を果たすことができると考えられたためである。

そして、効率的な組織運営と国民の管理・統制、訓練を促進するためには、軍事主義の核となる男性に国家が求める男性性を与える必要があった。軍事国家における男性性とは、男性優位的な立場をとり、目的のために暴力を正当化し効率性を重視する等、その手法は兵士を彷彿させるものであった。特に当時は国家のための自己犠牲精神が理想の男性性とされた〔佐々木 2019：22〕。またそれと合わせ、社会システムである徴兵制が軍隊文化として、「軍事化された男性性」をより涵養させる結果をもたらした。例えば、階級的位階秩序によって芽生える権力主義や、任務遂行意識とそれに関連する自己犠牲意識、女性を守護する屈強な精神と身体等が挙げられる。そしてこれらの軍隊文化は、社会の民族主義、国家主義、家父長制の信念体系に依拠し、より男性性の特性を支持・強化する機能を果たした〔권인숙 2005：27〕。

その後、韓国社会内の民主化が行われると同時に軍の民主化も推進されるようになった。しかし、軍部隊の下位単位で歪曲された軍隊文化、具体的には男性中心的な文化、権威主義的な文化、家父長的な文化が依然として残っている〔윤민재 2007：1115〕。現在では国家による軍事主義的政策は行われていないものの、徴兵制は今なお男性性を維持・強化、または再生産する機能を有していると考えられる。

以上のように、朝鮮時代の「伝統的な男性性」と、朴正熙政権以降の「軍事化された男性性」は男性権威主義という点で共通する点もあるが、多くの部分で異なる様相を呈している。前者の男性性は暴力に依拠せず、文人としての精神と道徳心をもって国を導き、端麗な美を追求する性質を持っていた。一方で後者は、暴力性を中心とした屈強な体と精神を持つ兵士として国家に追従し、任務遂行意識と自己犠牲を厭わない性質を持ち合わせていた。朴正熙政権がもたらした社会基盤と徴兵制が継続していることから、現在の韓国における男性性は、後者の男性性を起源に出発していると考えられる。よって、本稿では「軍事化された男性性」を

1 朴正熙大統領は力が国家に平和をもたらすと民衆に強調した。その根拠は、韓国が外圧の力に制圧・または脅かされ続けてきたという歴史があり、力や武力、軍事が国を守る礎になると信じてやまなかったためである。これは民衆にも共感され、結果的に当時の軍事主義的政治が力を持つ大きな理由となった。

2 本来、韓国と北朝鮮は同民族である。しかしながら朴正熙政権期においては、民主主義国である大韓民国は民族の正統性を継承・守護しようとする民族主体勢力であり、一方で、共産主義国である北朝鮮はそれを破壊し異質化しようとする反民族的階級独裁勢力である〔문교부 1975：145〕と規定しており、韓国側が本来あるべき民族像であるとしている。

中心に論を展開することとする。

さらに、軍事化された男性性を表し長い間韓国社会に根差している言説として「軍隊に行けば男になる」という言葉がある。そもそも韓国には徴兵に関する言説が多数あり、具体的には「徴兵を終えたこと＝成熟した、頼もしい」、「徴兵を終えていないこと＝未熟」、「徴兵を拒否すること＝国民にならない存在」等がある〔朴 2008：91〕。朴眞煥はこのような言説を総称し「徴兵をめぐる言説」と規定しているが、これらは「軍隊経験は人間を成長させる機能がある」ことや、「軍隊は人を変化させる影響力がある」ということを社会が認識し受容していることを表している。特に「軍隊に行けば男になる」という言葉の「男」とは、韓国における「男らしさ」、つまり「男性性」を彷彿させる言葉であると推測することができるだろう。

このような徴兵をめぐる言説は、韓国国民に受容され日常的に使用されている。しかし既存の研究では、徴兵や男性性を語る上での代表的な例として紹介されていながらも、言説自体に着目し分析したものはない。これは、これらの言説が軍隊で誕生し軍事文化として社会に表出・日常化し、人々にとって「当たり前」のものとなってきたがゆえに自動的に分析の対象から外されたという理由が考えられる。また、「男になる」という言説にみられる「男」とは、「徴兵を終えたこと＝成熟した、頼もしい」というイメージと結びついていることが予想される。さらに、それらは「社会の義務を全うした男である」という証明、つまり「軍事化された男性性」と関連していることがわかる。しかしながら、これはマクロな次元での説明であり、実際に使用する個人がその意味についてどのように捉えているかというミクロな次元については明らかになっていない。

2.2 韓国の徴兵経験者に関する研究

韓国で初めて徴兵制が実施されたのは1944年のことである。その後、時代の流れとともに廃止と復活を繰り返し、1957年に徴兵法が公布され現在までその枠組みを維持したまま実施されている。韓国の男性にとって徴兵とは人生で最も過酷で、避けては通れない国民の義務を背負わされる時期である。それまで家族や友人の庇護の下、築き上げてきた価値観が社会と断絶された軍隊生活を通して壊される経験は、その後の生活へ大きな影響を与える体験として韓国人男性間で共有されてきた。さらに、入隊する年齢は20歳前後が多く、精神的に不安定な青年期の彼らにとって、軍隊内で目の当たりにする出来事は強烈な衝撃を受ける経験であると多くの研究者が指摘した。

そもそも、韓国における軍隊に関する研究の歴史というのは非常に浅い。特に韓国が軍事政権下にあった1960年代から90年代にかけては、安全保障と直結することから、研究を行うことが不可能であった〔朴 2008：89〕。しかし、1990年代になり軍事政権が崩壊し民主化が進むにつれて、軍隊に関する研究も増加傾向を見せるようになった。特に、韓国国内では、社会制度としての軍隊や組織に関する研究、さらに軍隊とジェンダー規範との関係について分析した研究がよくみられる〔朴 2008：89〕。それと関連し、徴兵に関する研究は、人権侵害や、自殺、鬱病等の軍隊内で発生する弊害に関する研究が多い傾向にある。これは、民主化以前の韓国社会では明らかとなつてこなかった負の事実に対して、国民が関心を持ち、社会問題として捉えていることを表している。逆にいえば、それ以外の文脈で徴兵を語るということが困難である

ということを示している³。

徴兵が韓国人男性に与える影響について、負の影響以外の内容を取り扱う傾向にあるのが日本の研究である。それらの研究は、彼らが徴兵生活から受けた影響をさまざまな視点から明らかにした。まず、軍隊内での生活は彼らに訓練を強要するだけでなく、ある面では国民の一体感、連帯感、親近感の形成に大きく寄与し[春木 2000:53]、それによって「真の国民」「真の男」を作る通過儀礼として機能してきたという視点である[田中 2015:424]。また、徴兵によって組織された部隊は様々な地域から多種多様な背景を持った人間が集まる集団であるため、自然に組織生活での社会適応能力と忍耐力が生まれる[尹 2004:8]。またある面では、家族から物理的に分かれることで、家族愛と孝の精神を再教育し、強化される等の視点等が挙げられる。特に、急速な経済発展を遂げた70年代から80年代では、軍隊式の命令遂行能力が経済発展の原動力になったということや、反共主義の絶対化等がこの当時の特徴であったといえる[春木 2000:62]。

しかし、以上のような徴兵生活の影響を扱った研究は、徴兵経験に重点を置いて注目した研究がほとんどであり、個人の入隊以前の経験や転役後の生活に着目して具体的に紹介している研究は多くはない。軍隊の存在とともに発展してきた歴史を持つ韓国社会の中で、誕生・成長してきた彼らが、軍隊入隊以前に徴兵に関する知識や軍隊式の思考を身に着ける機会が全く存在しなかったとは考え難い。よって、入隊以前の生活や服役中の経験だけではなく、現在の行動や思考に至るまでの一連の過程を分析の対象とすることで、より厳密な意味で徴兵の影響を明らかにすることが可能になると考えられる。

このような議論に基づき、本稿では以下の2つの要素に着目して研究を進める。

- ①徴兵中の経験だけでなく徴兵前、徴兵後の経験も分析対象とし、徴兵と関連した感情や思考、影響をいつどの段階で得たのか分析する。
- ②①を踏まえた上で、「男になる」等の徴兵をめぐる言説を個人レベルにおいてどのように理解しているか、また男性間でどのような意味が共有されているかについて分析する。

3. 調査の概要

3.1 調査方法・対象

本研究の調査は2回のインタビュー調査から成る。

第1回目は、2017年9月に行ったインタビュー調査である。対象は、江原道江陵市にある江陵原州大学日本語学科の学生19名であり全員が徴兵経験者だ。調査目的は、徴兵中の個人の経験を語る際に、実際にインフォーマントが徴兵をめぐる言説を使用して話すかを確認することだ。調査方法は事前にアンケート調査⁴を行い、その結果を参考にしながら、同大学の教室の

3 軍隊に関する書籍の中には、実際に軍畢の若者の体験記を集めたものもある。それらの書籍は、未畢の読者を対象としたものであり、目的としては未知の存在である軍隊に対する恐怖心を払拭させるためや、負のイメージから脱却し健康的な徴兵環境と生活を韓国社会にPRするためのものである。出版は、主に大韓民国の兵務庁やその関係者が取り仕切っているものが多い。

4 本アンケートはインフォーマントの基本情報と入隊以前の徴兵に対する印象、軍隊内での生活に対する印象などインタビューを行う上で土台となる簡単な情報を収集した。なお、アンケートの詳しい内容は紙幅の都合により本稿では割愛するが、別稿にて論じる予定である。

一室を借りインタビュー調査を1人30分から1時間程度行った。主要言語は日本語を用い場合によっては韓国語を使用した。またインフォーマントに了承を得てインタビュー内容を録音した。なお、本稿では、部隊という言葉は陸軍・海軍・空軍等の大きな枠組みとしての集団という意味で使用する。また、歩兵・砲兵・DMZ等の下位単位の小集団を兵科と表記する。

第2回目は、2018年6月に行ったインタビュー調査である。対象は1回目の調査同様、江原道江陵市にある江陵原州大学の日本語学科の学生でその中の4人R, D, E, Gを選出した。各インフォーマントの名前の表記は、第1回目インタビュー調査のアルファベットをそのまま使用した。本調査の目的は、第1回目の調査内容を踏まえ徴兵以前と以後の経験を調査することと、徴兵の影響、特に徴兵をめぐる言説の中でも「男になる」という言葉を中心に、インフォーマント個人が「男」についてどのように認識しているかを調査することである。調査時間は1人30分から1時間程度である。また、第1回目のインタビューと同じ教室を借り、主要言語は日本語で、さらに記録として録音を行った。

またこの4人をインフォーマントとし再度調査を依頼した理由は、第1回目の調査でどのインフォーマントも自己分析能力に長け雄弁であるという印象があったためである。軍隊での生活というのは心身ともに困難や負担を与えるものであり、人によっては軍隊について語ることに対し抵抗感を覚える者もある。そのため心身的負担を受けないインフォーマント、かつ自分自身の変化の有無をより認知できる人物が適任であると判断した。また、勤務地や個人の背景が異なることも選定の理由である。

3.2 調査対象者が経験した徴兵制の概要

韓国の徴兵制度は短期間で急速に変容しており、その傾向は徐々に厳格さを失いつつある。本概要は、インフォーマントたちが徴兵を経験した2011年から2016年の間の徴兵の概要について記載した。

徴兵制度は韓国の男性であれば19歳になる年に徴兵検査を受け、特別な理由（健康の不具合、オリンピック選手など優秀な人材である等）がない限り20歳から35歳の間に2年未満⁵の徴兵につく義務のことである⁶。軍入隊以前に行われる徴兵検査によって対象者は身体等級1から7級に分類され、1から3級であれば現役で入隊、4級は補充役として社会服務要員・公益勤務要員に勤務する。そして、5級は軍へ入隊しないが、戦争時は戦時動労役として非軍事的戦闘支援業務を遂行する。なお、6級は免除、7級は再検査となる。多くの男子は大学在学中、特に大学1年生終了時に入隊するケースが多く、その際には軍休学を取得することが一般的である。大学1年生終了時に軍隊に行く場合が多い理由は、軍隊の中では出身地や年齢、社会的地位は関係なく、入隊した順に上下関係が発生するためである。

5 服務期間は部隊の種類ごとによって異なるが、インフォーマントが所属した陸軍や海兵隊であれば21カ月、社会服務要員は24カ月である。これらは調査対象者が該当する期間を含む2011年から2017年に設定された期間であり、文在寅政府始動の「国防改革2.0」計画に従い、2018年下半年から短縮を進め[김신숙 2020: 226], 2020年6月の入隊者から18ヶ月と21ヶ月になった(「국방부」병 복무기간 단축 조정: https://www.mnd.go.kr/mbshome/mbs/mnd/subview.jsp?id=mnd_011001000000 2021年8月22日 閲覧)。

6 軍隊は主に徴兵された軍人と職業軍人によって分けられており、本稿では前者を研究対象とした。徴兵された軍人は男性によって構成されているが、職業軍人の場合女性も入隊することが可能である。

部隊の種類としては、陸軍・海軍・空軍・義務警察・海洋警察・義務消防・常勤予備軍・社会服務要員、公益勤務要員等があり、任務内容や服務期間も異なる。また部隊の下位単位として兵科がある。

約2年間の軍隊生活を終えたのちは転役し、予備軍になる。予備軍になっても、定期的に訓練に参加することが義務付けられている。また、韓国では一般的に徴兵を経験した男子のことを軍畢者（クンピルジャ/군필자）、その対義語を未畢者（ミピルジャ/미필자）と表現し、それぞれクンピル（군필）、ミピル（미필）と呼ぶ。これを受け本稿では以下、徴兵経験者・未経験者を軍畢・未畢と表現する。

4. 第1回インタビュー調査

本調査のインフォーマントの約90%は陸軍出身者であった。これは、韓国軍の兵力の中でも陸軍が最も多いためであると思われる⁷。

4.1 インフォーマントの徴兵経験

19人のインフォーマントを対象に徴兵経験について調査を行ったが、彼らがインタビューで語る話は軍人としての勤務に関する話より自己と他者の関係に関するものが多かった。これは2年間の集団生活を行ったことに起因していると推測される。またそれに伴い、本調査の結果は主に人間関係に関することを中心になっている。なお、文字数の関係上インフォーマントの属性は表1に一覧化した。

まず第2回インタビュー調査のインフォーマントであるR、D、E、Gの徴兵経験について簡単に述べていく。

表1. インフォーマントの基本情報⁸

Inf	学年	生年	所属部隊	入隊時期	兵科
A	2年	1993年	陸軍	大学入学直後	装甲車の運転
B	4年	1991年	陸軍	大学1年生終了時	DMZ
C	3年	1993年	陸軍	大学1年生終了時	警戒・警備
D	3年	1994年	陸軍	大学1年生終了時	捜索隊
E	2年	1995年	社会服務要員	大学1年生終了時	老人施設への勤務
F	3年	1994年	陸軍	大学2年生1学期終了時	助教兵
G	3年	1993年	陸軍	大学2年生1学期終了時	野戦工兵団
H	2年	1995年	海兵隊員	大学1年生終了時	迫撃砲兵
I	3年	1993年	陸軍	大学1年生前期終了時	迫撃砲兵
J	3年	1993年	陸軍	大学1年生終了時	歩兵
K	3年	1993年	陸軍	大学1年生終了時	歩兵
L	4年	1992年	陸軍	大学1年生終了時	食品運搬
M	3年	1994年	陸軍	大学1年生終了時	海岸警備
N	3年	1994年	陸軍	大学2年生終了時	トラックの運転
O	4年	1992年	陸軍	大学1年生終了時	車両管理・運搬
P	2年	1995年	陸軍	大学1年生終了時	首都防衛
Q	3年	1994年	陸軍	大学1年生終了時	食物管理・仕分け
R	4年	1992年	陸軍	大学1年生終了時	歩兵
S	2年	1995年	陸軍	大学2年生1学期終了時	砲兵

7 韓国軍の兵力は、多い方から順に陸軍が46.4万、海兵隊を含む海軍が7.0万、空軍が6.5万である（外務省 大韓民国（Republic of Korea）基礎データ：<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/korea/data.html#section3> 2021年8月26日 閲覧）。

8 インフォーマントの学年は2017年当時のものを記載している。

R は、徴兵の中で最も割合が多い兵科である陸軍の歩兵として服務した。R にとって軍隊とは退屈で苦痛の場でしかなかった。その大きな理由は上級兵による嫌がらせが原因で人間関係を上手く形成することができなかったためである。軍隊の中では上級兵の命令は絶対であり、R のような下級兵は上級兵の命令により、同期と親しくすることを禁止され連帯責任を課される時もあった。そのため、同期との関係も悪化し、転役するまで同期や下級兵に対するいじめの連鎖は続いた。結局、R が親しくなった人物は同兵科の後輩 1 人のみであった。

D は、職業軍人の父を持ち、陸軍の搜索隊で周囲に期待される立場で服務していた。兵科自体は通常より体力を必要とする職務である上に、指導者の立場であった D は、期待の兵士としてテレビに取り上げられた経験を持っていた。彼は高い階級に対し誇りを持ち、自分は国家に認められた人間であるという意識を持っていた。また、一般兵⁹より訓練を行う時間が短く自身の将来について深く考えることが多かったし、その立場が理由で、脱走兵を銃をもって捕らえに行かなければならない仕事もした。同世代の仲間を違反者として追いかける経験は彼に衝撃を与える事件であった。しかし、D は徴兵経験前後の自身の変化について、「体力はついたが精神や思考については変化がない」と語った。

E は先天性の近視であるため社会服務要員として服務した。社会服務要員とは、持病や服務するうえで身体的な困難がある国民¹⁰が配属される部隊であり、軍隊内で生活をせず自宅から通勤する。E の職務は高齢者施設での介護であり、多くの人と出会ったが好意的な人は少なく、同期も施設職員も好きになれなかったと語った。施設職員は軍人ではなく民間人であるが、学生ボランティアには好意的な対応を取るのに対し、E のような社会服務要員は冷遇したという。元来、社会服務要員も正式な徴兵義務であるが、軍隊内で生活をしないため韓国社会では社会服務要員を兵士とは認めず、差別的に見る風潮があるためである。E にとっての徴兵生活は楽しいことはなく辛い日々の連続であり、韓国社会の厳しさを身に染みて感じるものであった。

G は、鉄や柵を作る野戦工兵団として服務していたが、半年間は特殊プロジェクト員として北朝鮮との境界に埋められている地雷撤去の任務を行った。この任務は志願制であったが、非常に危険を伴うため、生活上で優遇措置を受けることが多くその点に魅力を感じ引き受けたという。淡々と作業をこなしていたが、この任務は精神に異常をきたすものであった。G は作業への疲労を同期との関わりで癒そうとし、他の階級の兵士とは関係を持つことを避けていた。上下関係が非常に厳しい軍隊内で、作業外での精神的疲労を感じたくなかったためである。また、軍隊内の生活は不正と隠蔽が横行しており、G は軍隊に対し強い嫌悪感を覚えるようになった。

以上が、徴兵経験の内容である。軍隊といってもその経験は様々であり、一様に括ることが非常に難しい。1 回目のインタビュー調査では、徴兵以前と以後の状況については問わず、それは 2 回目のインタビューの調査目標とした。

9 ここでは兵役のため軍に入隊し、特別な任務に服務していない他の兵士のことを指す。以下も同様の表現を使用する。

10 身体どこかに何かしらの障がいがあるだけでなく、極度の肥満や痩身も対象となる。

4.2 徴兵をめぐる言説

第1回目の調査中では「男になる」という言葉を自然に聞くことができ、またそれとともに「責任感がついた」や「大人になった」という言葉も頻出した。この2つの言葉には「男」という語が付けられていないが、関連性を考慮してこれらも分析の対象とした。

まず、「男になる」という言説についてであるが、最もこの言葉を強調したのが首都防衛勤務を行ったPである。Pは軍隊に関して入隊以前から意欲的であったが、その理由は軍隊に行けば今より一人前の「男になれる」と考えていたためである。そのために、入隊以前に軍隊で達成したい目標をたて、その多くを達成することができた。軍隊での様々な経験は彼に「男」としての自信をつけ、また目標を達成したことから「男になった」とPは語る。また、Sは陸軍で砲兵として勤務し、軍隊に対して嫌悪感を持ちながらも、軍隊を経験したことで一人前の「男になった」という感覚があると語った。さらに少し異なるが、職業軍人の父を持つDはインタビュー中に「韓国の男として認められた」と「男」を強調し語る場面があった。

次に「責任感がついた」という言葉であるが、陸軍の歩兵として勤務したJは、軍隊へ入ったことは時間の無駄であったが入隊したことで責任感がついたと語った。だが、その「責任感」とは国を防衛するという「責任感」ではないとした。同様に陸軍の歩兵として勤務したKは、軍隊内で下級兵の世話を行ったことで、「責任感」や物事を最後までやり遂げる意思を身に着けることができたと言った。

最後に、「大人になった」という言葉だが、陸軍で警戒・警護の仕事を行っていたCは軍隊の生活を通して以前より「大人になった」と語る。以前から、軍隊はその特殊な環境と集団性から韓国社会では「小さな社会」と呼ばれている。その「小さな社会」で生き抜くため、様々な苦難に耐えたことがCを大人として成長させたと言った。Cの様に自身を分析し「大人になった」ことを自覚している一方、Mは変化の自覚がなかった。その変化に気づききっかけとなったのは昔から書き記している日記帳であった。過去に書いた明るく無邪気な内容と対比し、現在の自分は「大人になった」と感じる言説ができたと言った。

以上のように、それらの言説は自身が成長したことに関連して使われていた。しかし、その意味というのは非常に曖昧で、徴兵に関するどのような経験を通じて感じたものなのか明確ではない。さらに、「男になった」の「男」や「大人になった」の「大人」はどのような性質を持つ人なのか、また「責任感がついた」の「責任感」とはどのようなもので、誰に対するものなのかという点も不明瞭である。また今回、入隊する以前は勉強より遊ぶことを優先していたが今は落ち着き熱心に勉強に励むようになったと言ったインフォーマントがいたため、第2回目のインタビュー調査ではそのような事情と徴兵をめぐる言説とを関連させて考察を試みた。

5. 第2回インタビュー調査

以下は、第2回インタビュー調査の内容とそれに対する筆者の考察である。

5.1 インタビュー調査事例 R

Rは1992年生まれで、インタビュー当時大学4年生であった。

Rは、入隊以前に軍隊について知る機会は無かったと回答したが、インタビューを進めるう

ちに、「自分はいずれ軍隊に行くのかもしれない」という漠然とした思いの中で、日常生活で軍隊に関する知識が積み重なっていったと徐々に気づき始めた。これは、軍隊という場や徴兵に関する知識を無意識に受け入れてきたことを意味しているが、それらの知識は興味を駆り立てるものでは決してなかったという。Rには兄弟がなく、徴兵経験について語り合う相手がいなかったため、友人を介して間接的に聞いたものが多かった。そのため、Rにとって軍隊とは非常に現実味のない話であった。

大学に入学すると状況は一変し、自身の周りに軍畢者の上級生が現れた。しかし、Rは上級生の経験を聞くことを避けていた。その理由は、義務として行かなければならない場所の恐怖をわざわざ知る必要はないと考えたためである。これは、自身の生活の中に軍畢者が登場したことで、軍隊の存在が現実味を帯び、Rにとって直視できない恐怖の対象になったことを表している。

そんなRにも入隊する時が迫ってきた。Rは、入隊前に遊ばないと損をするという思いで日々遊びに明け暮れた。しかし、Rが遊びに興じる理由はそれだけではなく、恐怖と不安の対象である軍隊の存在を遊びに興じることで掻き消そうとしたためである。しかし、いくら遊んでも気持ちは満たされることはなく、かえって不安を増幅させた。その時の感情をRは、「胸の奥にぽっかりと穴が開いたような感覚」と表現した。Rの軍隊に対する不安は募り続け、軍隊の情報を調べられずにはいられなくなった。Rが軍隊を知るために用いた方法は、軍畢の体験を基に構成されたネットの書き込みを読むことであり、滞りなく徴兵を終えるための実践的な情報を中心に収集したという。これらの情報を収集した理由は、軍隊には危険が伴うという様々な情報を元々R自身が見聞きしていたためである。

Rに「男になった」という言葉について問うと、この表現に意味はなく、未畢を気楽にさせるため軍畢が使う気休めの言葉なのではないかと推測した。また、その言葉の真意とは「大人になれた」ということと同義であり、「男」や「大人」の意味については、自身の甘さを認識し矯正することができる人のことだと語った。さらに、R自身は軍隊で「責任感」がついたと感じておりかつ、その「責任感」とは任されたことを遂行することであると語っているが、自分が誰に対し、またどこまで「責任感」を感じるのかは本人も理解していなかった。

「男になった」という言葉は、Rにとって重要な意味を持っておらず、ただの一単語に過ぎないと考えており、「男になる」と「大人になる」という言葉は関連性が深く、むしろ同義であるとみなしているが、その詳しい意味については軍畢で共通理解が図られているわけではなかった。また、「責任感がついた」という言葉に関しても詳しい意味について軍畢で共通理解が図られているのではなく、R自身の認識と解釈に留まっていることが明らかとなった。

入隊直前に遊びに興じていたRであったが、軍隊を出て転役軍人となった今、怠惰な生活はしなくなったという。それには深い理由はなく、大学生として本来のあるべき姿になったからだと感じており、そのため徴兵で身に着けた「大人」としての行動や、軍畢としての「責任感」によって引き出される行為ではないと語った。

5.2 インタビュー調査事例D

Dは1994年生まれで、インタビュー当時大学4年生であった。

Dは職業軍人の父親に軍隊について、「男はみんな行くところだから心配なくていい」とだけ聞かされ、具体的な経験について聞くことはなかった。しかし、幼少期の頃から父が勤めていた部隊に遊びに行った経験があり、軍隊内の雰囲気を感じることが多かった。そもそも軍隊は民間人立ち入り禁止区域であるため容易に入ることはできない。しかし、Dの父親は地位の高い幹部であったため、その息子のDは特別に許可されていたのである。軍隊には中学生まで月1回ほど足を運び、父が転勤した部隊はすべて見学したという。

ここで注目すべきことは、Dが軍隊に「学び」や「見学」ではなく、「遊び」に行っていたということである。これは軍隊を訪れるとき緊張や不安を感じていたのではなく、知人に会いに行くような無邪気な気持ちであったということである。つまり、Dにとって軍隊の存在というのは他の軍畢や未畢とは異なり、恐怖や不安の対象ではなく自身の生活の一部であったということである。さらに、小・中学校の友人のほとんどが軍人の子どもであり、自身の経験が特殊だと感じなかったとDは語っていることから、軍隊の存在が身近にあったことが窺える。

そんなDも入隊直前は遊びに興じた。しかし、Dの場合軍隊を出た現在も真面目になることがなく遊んでいるという。また精神や思考に大きな変化はないが、ある側面では「男になった」という意識があると回答した。軍畢になった現在、未畢を見ると「あの子は変わるために軍隊に行ってきた方がよい」とDは感じることもあるが、その根拠については不明確であり、またそれは自分には当てはまらないと語った。さらに「男になった」という言葉に特別な意味はなく、一人前になれたという意味を付与しているだけであると回答しているだけでなく、韓国男性は本人の意思とは関係なく、常に戦争と密接に関わっているからこそ男らしくなければならぬという考えがあるため「男になった」という表現が用いられるのではと推測した。

2年間の軍隊生活を終えた時、Dは自由になったという思いと自分は軍隊を出たのだという高揚感を感じていた。その高揚感とは「国に認められた」ということや「大義を果たした」等の、D独特のものであった。しかしながらそれは長続きせず、「韓国国民としての真の男になった」という高揚感は1週間ほどで消失してしまったという。

以上のことから、Dは周囲とは異なる軍隊の捉え方をしていることが明らかとなった。それは、軍隊を恐怖や不安の対象ではなく身近な存在として捉えていることであり、一般の兵に比べ驚きや、本人を変えるような環境の変化が少ないことが特徴的であった。これは、幼いころから軍隊を身近に感じ雰囲気を体感してきた経験から生まれたものである。さらに、軍隊と自身の関係が他の男性より身近であるはずのDが、軍隊を出るとなぜ「男になる」のか、また「男」とは何かという問いに対して明確に答えられないことが非常に興味深かった。つまり、たとえ入隊以前から軍隊の存在が生活の一部であったとしても、「男」の意味を明確に理解する上でその経験は大きな意味を持たないということである。

5.3 インタビュー調査事例E

Eは1995年生まれでインタビュー当時大学3年生であった。

Eは軍隊に入隊する以前に軍隊について知る機会がほとんどなかったと語った。学校やその他の学習活動で学ぶこともなく、入隊直前ですらインターネット等の情報を自ら検索する行為自体億劫に感じていた。その理由は、行かなければならない場の恐怖を事前に知りたくなかつ

たためである。しかしながら、幼少期から高校生までは友人間で軍隊や北朝鮮について語り、知識を身に着けたという。しかし当時は入隊直前の感情とは異なり、「自分が行く頃には制度自体がなくなるであろう」という楽観的なもので、軍隊に対し実感を持っていなかった。

前述したとおり、社会服務要員は軍隊内に所属せず自宅から施設に通う。Eは一般的な男性とは多少状況が異なるが、入隊直前は他の男子同様遊びに興じた。しかしながら、現在は落ち着きまじめに勉強に取り組むようになったとEは語る。その理由は、軍隊内でただ毎日を過ごしている人を見て、悪例として学んだためである。また現在の自身の状況を、人生を阻む障害が取り払われ新しい始まりを迎えた状態と表現しており、この感覚が日々の生活を真摯に送る理由になっているという。

Eは徴兵生活を通して、自身も他の軍畢同様「男になった」という自覚があるが、周囲からはそのように思われていないことに憤りを感じていた。上でも述べたが従来から韓国社会では社会服務要員に対し差別意識がある。近年ではその意識も緩和されたとされているが、当事者であるEはそのように感じておらず、差別的に扱う風潮が依然として残っていると語った。

Eに「男になった」という言説の意味を問うと、以前より大人になることであり、その時初めて国民としての「韓国の男になった」という感覚を得られると語った。さらに、Eが考える「大人」とは、他者に対して配慮ができる人のことを指している。しかし、「男になる」ことの「男」の意味はよく分からないと語った。また、「責任感」に関しても入隊前と比べ本人は身についたと感じており、その意味は一つのことを最後までやり遂げようとすることであり、さらにいうなれば物事に取り組むことをすぐに投げ出してしまう子どもとは異なる、つまり「責任感がある」＝「分別のある大人」であると解釈していた。

Eは以前のような明るく無邪気な性格に戻ることを望んでおらず、今もなお戻らないように日々注意を払って生活を送っている。その理由は、軍隊に行って「男になった」のであるから、「大人」で「責任感」のある行動をしなければ人間関係に支障をきたし、さらに言うならば韓国社会から疎外されてしまうと考えているためである。また韓国社会を作っているのは軍隊を出た軍畢であるから、彼らに従わなければならないと考えていると語った。

以上のように、社会服務要員を経験したEは自身の成長に達成感を感じているのに対し、周囲がそのように認識していないことについて歯痒く感じていた。また軍隊に関する情報を得ることに恐怖を感じていたことから、徴兵以前に軍隊は恐ろしい場であると考えていたことが分かる。そのうえ社会服務要員に対する社会からの差別的な態度を認識する一方、先天性の近視を持つEにとって、その恐怖や不安は他の兵士とは比較にならないものであったに違いない。E自身は「男になった」「大人になる」「責任感がつく」という言葉の意味を自分なりに解釈し、軍畢としての行動を決定づける言葉であるとしながらも、それ以上のより詳細な意味については理解していないことが分かった。また日常生活において、軍畢としての行動を他の軍畢より厳格に守らなければならないという意識にE自身が制約されていることが明らかとなった。

5.4 インタビュー調査事例 G

Gは1993年生まれでインタビュー当時大学3年生であった。

G は、現在軍隊を否定的に捉えているが、幼少期は軍隊に対し異なる印象を持っていた。G は中学校卒業まで、いっとこと軍隊ごっこをして遊んだ。いとは幼いころから軍隊が非常に好きで軍隊について詳しいだけでなく、自身を上官の役、G を下級兵士の役として遊びを展開し、共に楽しんだ。この遊びは G が軍隊の知識を得るきっかけとなったのである。

また学校の教育活動の一環として、韓国の小学校では国軍の日に、徴兵義務につく 군인 아버지 (軍人おじさん) に感謝と励ましの手紙を送る行事がある。詳しい内容は覚えていないが G も小学生の頃に手紙を書いた経験があった。また, 현충일 (顕忠日) という殉国者と戦没将兵を追悼する日に作文や絵の大会が開催されることもあった。つまり、軍人に感謝をするように小学校で教育されてきたのである。

G が軍隊に対し嫌悪感を持ち始めたのは大学入学後である。そのきっかけは、当時の番組やニュースで軍隊の中で起こる様々な不祥事を知ったためである。さらに、入隊してから実際に不祥事が起きるのを目の当たりにしたため、入隊以前から持っていた否定的な感情をより強く感じるようになったのである。

G は他の男性同様、入隊以前に遊びに興じた。一般的には、入隊するとそれまでに勉強したことを全て忘れ、転役後に勉学に励むケースが多いが G の場合は異なっていた。軍隊は午後 10時から12時の間に「延灯¹¹」という時間が設けられているが、実際は勉強できない雰囲気がある。しかし G は、身に着けた日本語能力を衰えさせたくない一心で、周囲を顧みず「延灯」の時間を活用した。そのため、日本語能力を衰えさせることなく無事転役することができたのである。したがって、G の場合他の軍畢とは異なり、軍隊内から継続して勉学に励んでいたことから、軍隊を出たことと勉学に励むことは関連性がないことが特徴である。さらに、軍隊内にいる頃の方が時間的制約もあったため、現在より積極的に勉学に励んでいたという。

G に「男になった」という言葉について問うと、そのような感覚を持ち合わせていないと主張し、むしろ「男になる」ことを目標として軍隊に入隊したのではなく、軍隊を出ることが当たり前の韓国社会において、その経歴作りのために入隊したことが目的であったと述べている。また、「責任感」や「大人になった」という言葉に関しては、G は「責任感がついた」という感覚はないが、自分に対しての「責任感」が身についたと感じていると語った。漠然と生きてきた以前に比べ、徴兵という妨げがなくなってからは将来を見据え、人生をより真剣に考えるようになったという。

また、「大人になった」という言葉に関して、G 自身は以前よりも「大人」に近づいたと感じている。しかしこれは、上記で述べた「軍人おじさん」に対し「大人」であるというイメージがあり、その条件を満たした現在の自分を「大人になった」と感じているだけであるため、「大人になる」ことに深い感情はないと語った。

以上のように、G は入隊以前に非常に多くの経験、またそれに伴う知識を身に着け、入隊したことが分かった。また、入隊以前に軍隊に対して抱いていた肯定的な感情から否定的なものに変化しており、否定的な感情が転役後の G の思考に影響を与えていた。

11 延灯とは就寝時間の10時を越え、1時間から2時間程度の活動に当てることができる時間のことである。その主な過ごし方はパソコンの使用や勉強、読書、テレビ観賞等である。

6. 結論

以上のように、本調査のインフォーマントにおける軍隊に関する経験は非常に多様であった。徴兵中の経験だけでなく、徴兵以前の個人の背景と本来持っていた心情も非常に多様で、約2年間の軍隊生活だけが彼らに影響を及ぼしたとは断言できないことが明らかとなった。特に、「入隊前に軍隊に対する知識や考えを得る機会があったか」という問いについては、日常生活を通じて意識的、無意識的に関わらず軍隊や徴兵に関する知識や思考が構築されることが明らかになった。特に、Rの事例は無意識に得た知識や経験を表す事例であり、今回のインタビューを通してインフォーマント自身がその事実を自覚することとなった。

さらに、入隊以前の経験は様々だが、徴兵を恐怖、嫌悪感、漠然とした不安等の負の印象で捉えることが多く、これらの印象が入隊直前まで個人の行動や考えを決定していた。特に、軍隊内で起こる不祥事に関する報道や、韓国社会にある差別意識が負の印象を与えるきっかけとなっていた。しかし、職業軍人を父に持つDのように軍隊の存在が私生活の中にある場合は、大義を果たす兵士のような国家の安全を守る意識や、義務を果たす国民としての意識や誇りが見られた。つまり、場合によっては約2年間の軍隊生活と同等か、それ以上に事前経験が個人に影響を及ぼすことが明らかとなった。

軍入隊前は学生であるのにも関わらず大学生活に意欲的でなかったが、転役後は落ち着き意欲的になったかどうかについて言及すると、「徴兵前に比べて、転役後は真面目に生活するようになった」と答えたEとR、「徴兵前後に変化なく過ごしている」と答えたD、さらに「徴兵中がより自ら工夫して意欲的に生活した」と答えたGなど、回答は様々であった。しかし、EとRのように転役後により意欲的になったと回答したインフォーマントにその理由を尋ねたところ、「自分の生活を阻害する存在がなくなったため」、「本来の姿に戻っただけ」、「徴兵中の怠惰な生活をする人を見たから」などと答えた。つまり、生活態度を改めたのは「男になったから」等の意識から導き出される行動ではなかった。ただ、Eは「男になった」とことと転役後の行動を結びつけているが、これは社会服務要員出身である自分に対して下される評価を意識したものであった。

一方、「男になる」に代表される徴兵をめぐる言説については、第1回目の調査を通して多くのインフォーマントから聞くことができ、それ以外にも、「大人になる」「責任感がつく」という自身の成長を表す言葉も頻繁に現れた。

軍隊に行くと「男になる」と「大人になる」という言説はR、E、Dによって「ほぼ同義である」という回答を得た。さらに、「男になる」という言説の「男」が、韓国人男性間で共通認識としてどのように理解されているかという問いに対しては、「詳しいことは分からない」または、「特別な意味はない」といった回答を得た。一方、共通認識が不明確であったため、自分が思うイメージについて質問した場合、Rの「自分の役割を果たす人」、Dの「国を守る人」、Eの「配慮のある人」、「自分の脆弱さを認識し矯正できる人」、Gの「軍人おじさん」などと多様な回答を得た。すなわち、彼らが日常的に使う「男になる」等の表現の意味は、軍隊内の経験や以前から持っていたイメージ、または徴兵中の自分の経験を通じて解釈されており、必ずしも軍畢の間で何かしらの意味が統一されているわけではなかった。

また、「責任感がついた」という言葉も、2回のインタビュー調査を通して多く登場したが、

Gのように「男になった」ことを自覚していないインフォーマントにも意識されているようであった。この「責任感がついた」という言葉は、Rの「任されたことを遂行すること」、Eの「一つのことを最後までやり遂げること」から分かるように、何か目標を成し遂げることという意味で認識されていた。これは、「軍事化された男性性」の要素でもある任務遂行能力と関連性がある言葉であると考えられる。しかし、「軍事化された男性性」における「責任感」の対象は国家であるのに対し、インフォーマントが語る「責任感」の対象は国家に留まらず、自分や周囲の者にも向けられていた。つまり、「軍事化された男性性」は軍畢の若者にとって、「対象を限定しない責任感」という形で現れるということが明らかとなった。

本稿の調査によって、韓国社会内で使われる「徴兵をめぐる言説」の存在を認識しているながらも、それらの意味をより明確に理解しているインフォーマントはなく、韓国人男性の間で共通の理解があるわけでもないことが分かった。しかし、その構成要素の一つである「責任感」はその対象を変えながら、何かしらの形で男性たちに共有されていたのである。これまで韓国社会における2年間の軍隊生活は男性を社会化し、彼らを「男」にする機能があると信じられてきた。しかし、個人の経験に注目してみると、その影響は2年間の徴兵生活だけでなく、日々の生活の中で得る知識や考えも徴兵を捉えるうえで大きく影響していることが分かった。したがって、男性性と徴兵制の関わりを明らかにするためには、徴兵期間だけをとりあげるのではなく、その前後の生活まで踏み込んで検討することが必要だということである。

付記

本稿は、全北大学考古文化人類学科 BK21 FOUR の支援による研究成果の一部である。

7. 参考文献

[日本語文献]

- 尹載善 (2004) 『韓国の軍隊』 中公新書
 田中雅一 (2015) 『軍隊の文化人類学』 風響社
 佐々木正則 (2019) 「現代韓国社会の男性性－軍事主義との関係から－」 『ジェンダー史学』 第15巻 pp.19-33
 春木育美 (2000) 「軍隊と韓国男性：徴兵が韓国男性に与える影響」 『同志社社会学研究』 第4号 pp.53-65
 春木育美 (2011) 「韓国の徴兵制と軍事文化の中の男性と女性」 『韓国朝鮮の文化と社会』 第10号 pp.95-110
 朴眞煥 (2008) 「現代韓国社会の男性性－軍事主義との関係から－」 『コンタクト・ゾーン』 第2号 pp.89-108

[韓国語文献]

- 권인숙 (2005) 『대한민국은 군대다』 청년사
 금장태 (2001) 『한국유교의 이해』 한국학술정보 (주)
 김진숙 (2020) 『역사와 쟁점으로 살펴보는 한국의 병역제도』 (주) 메디치미디어

문교부 (1975) 『고등 학교용 국민 윤리』 대한 교과서 주식 회사

박노자 (2009) 『남자 만들기』 푸른역사

존베이넌 (2011) 『남성성과 문화』 고려대학교출판부

윤민재 (2007) 「한국사회의 군대문화와 군사문사형성에 대한 사회학적 고찰」 『한국사회 학회 사회학대회 논문집』 第12号 pp.1113-1128

황진희·김선희 (2020) 「신라와 조선의 종교적 사상에 따른 남성 미용 문화 비교 연구 — 화랑과선비를 중심으로—」 『한국인체미용예술학회지』 第21卷 pp.241-252

[인터넷사이트]

「국방부」 병 복무기간 단축 조정

(https://www.mnd.go.kr/mbshome/mbs/mnd/subview.jsp?id=mnd_011001000000)

2021年 8 月22日 閲覽)

外務省 大韓民国 (Republic of Korea) 基礎データ

(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/korea/data.html#section3>)

2021年 8 月26日 閲覽)